



國家圖書館編

東亞同文書院

中國調查手稿叢刊

115

六月三日

國家圖書館出版社



國家圖書館
編

東亞同文書院
中國調查手稿叢刊

115

國家圖書館出版社

第一一五冊目錄

昭和四年（一九二九）調查報告（第二十六期生）

張家口事情

張家口情況

三宅勳

第二十七卷

.....

一

南北滿洲勞動事情調查

南北滿洲勞動情況調查

岩橋竹二

第二十八卷

.....

九九

雲南、四川に於ける畜產品調查

雲南、四川の畜產品調查

長友利雄

第二十九卷

.....

二八五

雲南輸入綿製品調查

雲南進口棉製品調查

栗木鐵男

第三十卷

.....

三四五

太原、大同、張家口、石家莊に於ける金融事情

太原、大同、張家口、石家莊的金融情況

二川薰

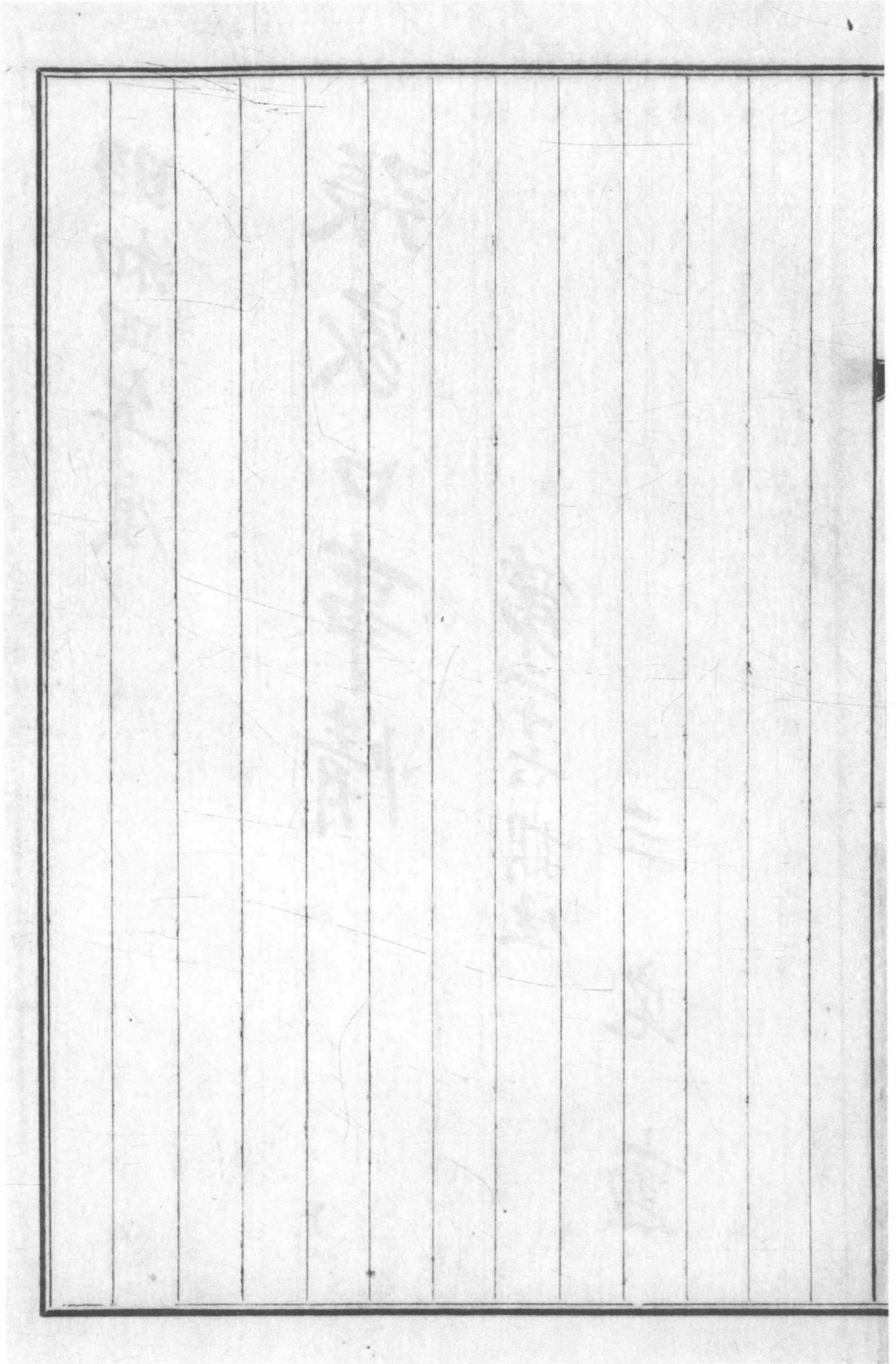
第三十一卷 四四五

昭和四年度

張家口事情

第二十六期生

三宅 勲



緒言

蔣馮二派の抗争にあり、東平漢線が不通になつたといふのを聞いたのは、もう旅行に立つのも間の無い事だつた。この確報を得る余程やほ、同方面の交通は余程、不あで、早う通行し得るや否や、同方面を通り、山西省に入らうとする。私達には、さういふ氣掛りの種だつた。もと山西の政治を調査しようとした私は、この旅行の不安から予備調査に氣が向かず、寧ろ全盛と云ふこともつ程何も為なかつた。と、旅行に立つた時には、山西省へ、石家莊からは入れようとは思はなかつた。それほど、~~誤~~同方面の事柄は急を告げ、~~ぬ~~右にある。それでは、~~東~~閻錫山の特別保護を世見る、は入る行つたのだが、予備調査を怠るお蔭、政治は何から手をつけようか、わからぬ。二三の材料は手にしたか、之を以て一調査を名づけるには、あまりに貧弱すぎる。ので、先に、同文庫の通信員であつ

たし西氏^西の調査に個人を完備してゐるものはある、その後既に八年
を経過して殊に北伐完成後の政治的経済的狀態に著しい変化
あらん事と予想し、張家は事情に~~變~~變替へられた款である、この
報告は在張家に領事館の民國十五年の調査にかゝり、その變化
著しきものあらんと想像せらる、所は(例へば行政機關)と領事
につきて、之を質せり、移入、貨物、ない人に統計等は皆最近の物
にせり、而して之も同領事館の保有にかゝるものなり也。此の調査に於て
私の努力は唯ひとり轉記のつ方にあるのみなり。多大の費用と多大
の日子を費して、~~得~~得ずかに爲し得たる所かばかり微小なる、而して此
を以て、莊重なるべき調査の責務を糊塗せんとするは、衷心慚
愧に堪へざる所である。然れども、表脱し得る物のみが自己の得たる
ものの外に~~此~~此を思へば又必ずしも、悲歎のみするに當らず。
それと調査のまつしき事實は依然と存し、如何にもするを得ぬ

張家口事情

目次

第一章

△一般狀況

沿革第一章——位地及地勢第二章——氣候風地第三章——市街第四章——人情風俗第五章——言語
人口第六章——行政附官公署第七章——名勝古蹟第八章

第二章

△商業

概況第一章——移出第二章——輸入第三章——農產物第四章——礦產第五章——干葡萄第六章——岩塩第七章——藥材第八章——生牛第九章——移入第十章——綿布第十一章——綿糸第十二章——燐寸第十三章——砂糖第十四章——紙捲第十五章——日用洋雜貨第十六章——食料第十七章——罐詰類第十八章——陶磁器第十九章——青子第二十章——茶第二十一章——移入第二十二章——移出第二十三章——統計表第二十四章——本社商店第二十五章——外人商賈第二十六章

第三章

△金融機關

銀行第一章——票莊第二章——錢鋪第三章——當舖第四章

第四章

△通貨

五十六

五十一

十九

銀兩 銀錢 銅元 銅錢 紙幣

第五章 爲替及標期 六十一

第六章 度量衡 六十三

第七章 工業 六十五

天然資源 精製業 皮革業 製粉業 製糖業 毛織製造業

第八章 交通及通信 七十七

通路及里程 平穩鐵道 自動車 牛馬車 駱駝 人力車 馬匹

電信 電話 郵便

第九章 學校 宗教 新聞 八十七

第十章 警備 消防 衛生

第二十七卷 張家口事情

第一章 一般狀況

カ一節 沿革

張家口は東にも呼ぶ。蓋し歸化城を西にと呼ぶに對して斯くはあなる可し。又た外國人は一般に「カルガシ」(KALGAN)と呼び、張家口驛發行の切符面には「諸君使用せり。其語源は露語の「カ」入に」と云ふ意に因るものなりとの説あるも確ならず。北三廳志を閱するに張家口の東北に東高山、西に西高山峭立し、其間僅に百歩を隔て、相對し、恰も關門の如し。張家口、名は此に因る云々とあり。思ふに今の大境門の附近の形勢を考へるなる可し。

當地、沿革を考ふるに

前漢 上谷代郡の北塞なり。

後漢

馬桓縣、雜居地たり

署

廣寧郡下洛縣の所屬たり

後魏

同郡廣寧縣の所屬たり

隋初

燕州の所屬たり

同大業年代涿郡懷戎縣の所屬たり

唐初

爲川郡の西境たり

同宋

武州文德縣の所屬たり

遼

歸化城文德縣に屬す

金

撫州に屬す

元

上都路宣德府に屬す

降る明朝に至り、萬全衛の設けらるゝ、其の所屬に歸し、宣德四年に同衛の指揮張文が張家口堡城(即ち今下堡也)を築き守備の隊を分駐せしめ、嗣て萬曆四十一年に

直隸巡撫汪道亨は更に永遠堡城(即ち今の上堡也)を築
 きて馬市を用き蒙古との通商を始めたり。清朝の康熙三
 十二年に於て、萬全縣を廢し、萬全縣の設置せらるゝや、初
 め當地に同縣丞を駐^衛在せしめて錢糧驛站の事務を掌ら
 しめたるが、張家口の繁榮は漸時萬全を凌ぐに及ぶ遂
 に同縣署は當地下堡に移轉するに至れり。一面には張家
 口外西北地方に移民するもの漸く多きを以て、雍正年間
 察哈爾都統の上申に基き、張家口同知をも此地に置き、
 口外一帶の移民事務を管理せしめたが、民口三年同知を張
 北縣に改め、縣署を口外なる~~興~~外^堡に^興黃城に移し、最
 近まで此地に在りしも、最今年察哈爾省の設けらるゝや、
~~張北縣~~口外の地も今は萬全縣の管轄に入り、以て張北縣
 署を撤廢するに至れり。

要するに當地は北辺の瘠地にして、古代は民人少き貧寒な
 る部落に過ぎずして、何等文化の見るべきものなく、行政の
 所屬は、隋朝郡縣の改廢に伴ひ變遷常なかりしも、隋朝
 加守備の隊を駐め以て塞外部族の來襲に備へたる事實に
 徴すれば、地勢上に於ては、北方の要害として、早くより重要視
 せられたる事を推察するに難からず。而して市場としては蒙
 古と通商開始以來、明清兩朝の間は漸時發展して今日の
 繁榮を見るに至れるものなり。明の劉孔印が宣鎮圖説に
 「上西路は敵寇の一藩を隔て最も要害と爲す。右衛城の武備
 疎弱ならば、全鎮震恐す可し。蓋し張家に來遠城は堡は
 統て全鎮の巨市にして萬虞の咽喉に繫る云々と説ける一節
 は能く其當時の状況を解得せしむるに足る。
 當地を外に對して開放したるは、清朝咸豐十年の北京

條約に依り、庫倫と共に露國に對^同を放したるを初とす。後民國三年に到り多倫歸化城と共に各國に對し自用商埠たる事を聲明せり。

第二章 位置及地勢

張家口は北緯四十一度東經百十四度四十分の處に位し北平を去る西北に鐵路にて、三百四十支里、多倫、庫倫、歸化城に通ずる各路の一大集合地矣なり。其地勢北西東の三面は陰山山脉の支脈を以て圍繞し、南方は展開して宣化平原に通じ、海拔實に三千七百尺なり。洋河の支流たる通河は市の東に沿いて南流す。萬里、長城は市の北端大境門を挟みて蜿蜒長蛇の如く、漢蒙の咽喉を扼す。門外を口外と云ひ、門内を口内といふ。市の北方に徒耳立する山脉を横斷せる一溪流に沿つて溯ること七八十支里にして「ハニルバル」の高地に達せば所謂

6
蒙古大高原にして渺茫千里眼界を達する物無し。

オミヤ 氣候及風地

空氣は四處を通じて甚はだしく乾燥す。春季は温暖なるも烈風吹き荒び、朦々として砂塵を飛ばし、天日共に闇晦たる事あり。従つて呼吸暑病等割合に多し。冬季は寒氣酷烈にして華氏零下十八度乃至二十五度を示す。夏季は比較的暑氣強からず、往々として日中有度に昇る事あるも、晝夜の氣温に大差あるを以て、朝夕は涼快を覺え、蚊帳を要する事稀なり。秋季は氣温度に適ひ、天候清澄にして風少く、年中最良の期節なり。否は四季順環の期節を示せば大約次の如し。

春季、四月に初り六月に終る

夏季、七月に初り八月に終る

秋季九月に初り十月初旬に終る

冬季十月中旬に初り翌年三月に終る

オロホ市街

市街は南北約八支里、東西約一支里半の細長き市街にして漸時南方に發展してあり。口内は外の二部より成り、口外は大境門以北に在り元宝山下の隘路に在り、旧露國居留地あり。蒙古人の來往して漢人と商取引をなす所とす。口内は大境門以南の地にして上堡、下堡及び停車場附近、新市街を含む。堡と稱するは上下各一個の堡砦を有するを以て之を中として、其周圍を總稱せるものなり。上堡は北半部即ち万里長城下大境門より石門河と稱する辺までの總稱にして、堡砦は周圍百五十間四方余りの城壁を繞らす。堡城内は雜貨、馬具、洋皮商等